講演 5

産後のホルモン剤無反応の続発性無月経と食欲不振、抑うつ状態に補中益気湯が著効した症例

中原 恭子 先生

医療法人社団 女性クリニック ラポール

1985年　広島大学医学部 卒業
同　　年　広島大学病院 など
1991年　米国コロンビア大学 など 留学
1995年　マツダ(株)マツダ病院
1997年　市内個人病院 院長
2008年　女性クリニック ラポール開設
2010年　医療法人社団女性クリニック ラポール開設

はじめに

産後、月経の再開には通常半年を要するが、月経の開始が遅れると女性は不安感を感じ気の異常をきたす。無月経の場合、通常はホルモン剤の投与に反応するが、中には無反応で漢方の力が必要となることもある。婦人科疾患の多くは血の異常と考えられ、補血剤や駆瘀血剤が奏効することが多い。

そこで今回は、強い気虚気鬱による無月経が疑われ、補中益気湯が奏効した症例を紹介する。

症　例

症　例：39歳 女性。

主　訴：続発性無月経、第2子希望。

図1　前医での血液検査結果（X年4月27日）

検査項目	結果	単位	基準値	
TSH	1.921	μIU/mL	0.340～3.80	
FT3	2.3	pg/mL	2.1～4.1	
FT4	1.0	ng/mL	0.9～1.7	
テストステロン	0.05未満	ng/mL	0.06～0.86	
プロゲステロン	0.1以下	ng/mL	8.5～21.9	黄体期
LH	1.58	mIU/mL	1.76～10.24	卵胞期
FSH	6.82	mIU/mL	3.01～14.72	卵胞期
プロラクチン	3.43	ng/mL	6.12～30.54	卵胞期
エストラジオール	14以下	pg/mL	19～226	卵胞期

図2　初診時所見①

身体所見

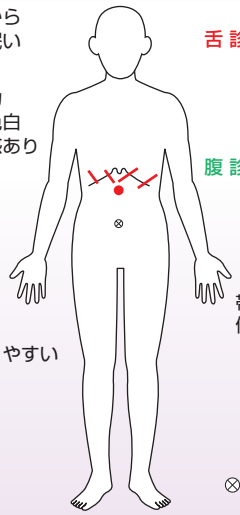
身長：153cm　体重：37.1kg　BMI：15.8
血圧：98/50mmHg　体温：36.6度

東洋医学的所見

瞼が重そう（(津田玄仙の言うところの)眼勢無力）　痩せ　色白
やつれ感あり
舌 診：痩　淡紅　歯痕あり　舌下静脈怒張なし
脈 診：細　偏数　偏沈
腹 診：腹力2/5　軽い胸脇苦満　心下痞

【弁 証】脾気虚　肝気鬱結　（肝火上炎）
【論 治】補気補血　疏肝解鬱　理気・瀉火
【処 方】クラシエ補中益気湯7.5g/日（分2）　女神散2.5g/日（分1）

図3　初診時所見②



昼食後から
ずっと眠い

望 診：眼勢無力
痩せ　色白
やつれ感あり

脈 診：細
偏数
偏沈

足がつりやすい

舌 診：弱々しい
痩　淡紅
歯痕
舌下静脈怒張なし

腹 診：腹力弱　2/5
軽度胸脇苦満
心下痞

帯下が濃い
便秘

⊗へその位置

妊娠歴：1経妊1経産、妊娠および分娩時の経過は正常、大量出血なし。

既往歴および家族歴：なし。

現病歴：X－3年に自然妊娠による経膣分娩、完全母乳で2.5年後に卒乳した。その後、月経が再開しないため分娩した病院に相談し、ホルモン剤が投与された。しかし月経は1回のみで、以降は不順なため排卵誘発剤を併用したが十分な基礎体温の上昇が得られず、また妊婦と一緒の待合室が耐えられないという理由で、X年9月6日に当院を初診した。

現　症：抑うつ気分、食欲不振、易疲労感、便秘、足がつりやすい、瞼が重い、頭痛、黄色帯下。また、体重減少が顕著であった（妊娠前；39kg→出産直前；47kg→出産直後；42kg→授乳中；35kg、初診時；37.1kg）。前医での血液検査では、エストラジオール値は低下しているが、下垂体機能の低下などは認められなかった（**図1**）。

すでに産後3年が経過しているが、参考に「エジンバラ産後うつ問診票」を用いて抑うつ状態を調査したところ、総合点は12点（カットオフ値は9点）であり、うつ状態と判断された。

初診時の身体所見・漢方医学的所見：図2、3に示す。

これらの所見より弁証は脾気虚、肝気鬱結（肝火上炎）であり、論治は、補気補血、疏肝解鬱、理気・瀉火とされ、全体的に気の下がったような印象を受ける望診から、補気剤の中でも升提作用をあわせ持つクラシエ補中益気湯7.5g/日（分2）と、産後の理気清熱作用を期待して、女神散2.5g/日（分1）を開始した。

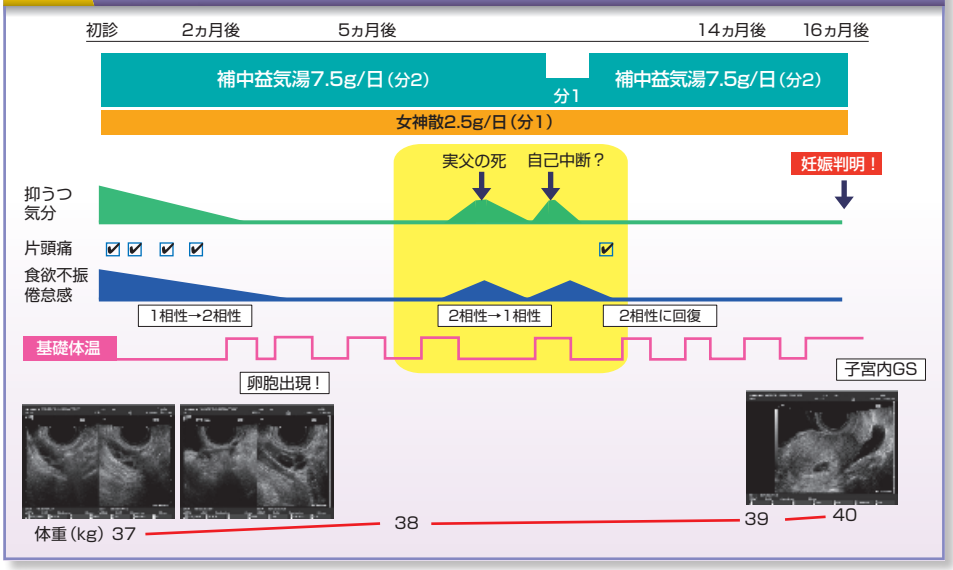
経過（図4）：2ヵ月後には抑うつ気分、片頭痛、食欲不振、倦怠感はほとんど消失し、超音波画像でも卵胞の出現を確認し、基礎体温も二相性に変化した。この経過にともない体重は5ヵ月後には増加傾向に転じ、家族からも「だいぶ元気になったね」と言われるようになった。経過中に、実父の死去や自己判断で補中益気湯を半分に減量したことで図のように、症状の再燃や片頭痛の再出現がみられた。超音波画像でも卵胞が縮小しており、基礎体温が一相性に変化したが、その後、服薬を再開することにより基礎体温は二相性に回復した。さらに、その2ヵ月後には妊娠が成立し、子宮内に胎嚢が確認できたため廃薬とした。体重は初診時より3kg増加していた。

まとめ

本症例は、ホルモン剤に反応しなかった産後の無月経の原因を脾気虚・肝鬱に求め、補中益気湯の投与で月経の再開と体調の改善をえることができた。

産後は血の異常を考えることが多いが、気の異常も注視しつつ、本症例のように補気剤の投与や、場合によっては理気薬などを考慮すべきと考える。

図4　臨床経過



Discussion

木村：補中益気湯の理気作用について追加のご説明をお願いします。

中原：産後には理気作用がある女神散を処方することが多いですが、この患者さんは補中益気湯を十分量投与することによって気鬱を防ぐことができました。患者さんの自己判断による減薬で症状が再燃したことを考えると、気のエネルギーが不足していれば、まず気を補って回すことで初めて効果が得られると実感しました。

木村：他の処方の鑑別など、実際の臨床ではどのようにされていますか。

中原：産後は血の異常として血虚を考えることが多く、加味帰脾湯の選択も考えるところですが、この患者さんは不安や不眠、動悸などの「心」の症状がなかったため、補気剤の代表方剤である補中益気湯を選択しました。